

社会復帰を目指すアルコール依存症者の回復意欲維持の方法について

- 回復者モデルをもつことの有効性 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
前田 智志

筆者は、アルコール専門病棟をもつ精神科病院のアルコール・デイケアで、スタッフ補助のボランティア活動を行っている。ボランティア活動を行う中で、参加メンバー全員の回復意欲が高く、それぞれが社会復帰に向け努力をしているということに関心があった。

アルコール依存症は「自分で飲酒のコントロールができなくなり、飲んではいけない時、場所、場合でも飲酒してしまい、問題を起こす病気」とされている。発症すると治癒は難しく再び酒を飲むと元の状態に戻ってしまう。再発を防止するには断酒以外に方法はない。また、最飲酒し再発する場合も多く、回復が困難な病気であるともいえる。回復支援には、入院治療、外来治療、デイケア、社会復帰施設、自助グループ等さまざまなものがあるが、いまだ再飲酒をしてしまう者が後を絶たないのが現状である。

そこで、本研究では、社会復帰を目指すアルコール依存症者が、どうすれば回復意欲を維持し続けられるかを明確にすることを目的とし研究を進めることとした。

研究1では、断酒会に出席しているデイケアの参加メンバーが、日頃からどのようなことを心がけることで、回復意欲を維持しているのかを半構造化面接により確認した。質問内容は、1)断酒決意のきっかけ、2)回復のために心がけていること、3)周囲の支援、4)回復に向けての悩みについてであった。対象となったのは7名(男性6名、女性1名)で、年齢は39歳から65歳であった。全員が、断酒会に所属していた。その結果、社会復帰を目指す者は、過去の自己像を反面教師とし、新しい自己像を描こうと努力しており、また、その努力と断酒会や家族の支援が互いに関連しあっていることが分かった。このことで社会復帰を目指す者の回復意欲が維持され、さらに強化されているのではないかと考えられた。また、年代別にカテゴリーを分類すると、30・40歳代の男性は、社会復帰後に仕事の再開を目指していることが分かった。そこで、仕事の再開をめざす30・40歳代のアルコール依存症の男性が、社会復帰と断酒継続を両立させるために、どのようなことを支えにしながら回復意欲を維持しようと考えているのかを明らかにするため研究2を行った。

研究2では、研究1でインタビューを行った対象者の中で、30・40歳代の男性にあたる3名に対し、1)1回目インタビュー後の回復に関する状況について、2)仕事の再開と断酒の継続をどのように捉えているのかについて、の2つの項目について、再度、インタビューを行った。その結果、仕事の再開をめざす30・40歳代の男性は、すべて仕事と断酒会の両立を考えており、その中でも断酒会を優先していることが明らかになった。また、この30・40歳代の男性は、断酒会の先輩回復者をモデルとして回復後の新しい自己像思い描き、これを回復のための支えとし回復意欲を維持していることが明らかになった。